

全国方言辭典

東條操編

全国方言辭典

東條操編

東京堂出版

序

一国の言語の研究は共通語現象と共に全国の方言現象についてこれを行わなければならない。語彙については、共通語を内容とするいわゆる標準語辞典乃至国語辞典と共に、俚言を採録した方言辞典の編纂が必要である。国語の理合はこの両面を具えて完全となる。

欧州において十九世紀以来、頗る方言採集の機運が起り、現代に及んで、一地方の外に一国を範囲とする大辞典が刊行された。

J. Wright の *The English Dialect Dictionary* (1905) が有名な大著なることはいうまでもないが、近くは K. Jæger 等の *Glossaire des parois de la Suisse Romande* (1924) の二大冊がある。

翻つてわが国を見れば、明治以後多くの方言集の刊行を見たが、諸国の方言を集録した江戸の「物類称呼」(安永四・一七七五) 一部を除いては、未だ全国方言辞典の出版された事を知らない。これは学界のためにも社会のためにも遺憾なことである。けだし、全国方言辞典の編纂出版の容易ならざるためであらう。

方言の調査には、臨地調査、通信調査、文献調査の三つの方法があり夫々長短がある。言語地理学では臨地調査若しくは通信調査による事が多く、Gillieton は臨地調査により、Webster は通信調査によつた。俚言採集の理想としては一々現地に臨んで地方人の言語を親しく聴く事が上乗の法であるが、臨地の採訪となれば自然、調査地点に制限ができるために調査網が粗大となる虞がある。通信調査は調査地点を思うままに細密に配置できるのは便利であるが、多数の報告中には正しからぬもののある事を予想しなければならぬ。文献調査は言語地理学的研究にはあまり適当でない。

全国方言辞典編纂の場合においてはまたこれとは事情の異なるものがある。通信調査によつて全国の俚言を網羅する事はまず絶望といつてよい。通信調査は元來質問書の解答の範囲内で報告を求めるものであるからである。理想としては臨地調査であらうが、一地方ならいざ知らず、全国各地の俚言を漏れなく一人の手で採集する事は個人の能力に限界がある以上、これまた不可能に近い。幸にして、各地に連絡のよき調査者を得て、広く全国に調査網を張る事に成功し、これに一定の調査方針を与え、一斉調査を行うことができれば、これは完全な方法である。恨むらくはわが国の現状はまだこれを許さない実情にある。今日、わが国において実行の望める方法とはいへば、文献調査こそ唯一のものである。

わが国には現在、五百部に余る方言集と、俚言を掲載した多くの地方誌とがあり、これを集成すればほぼ全国の俚言を網羅する事ができる。一方言葉の編纂にも、方言に関心をもつ地方人の多年の採集の苦心が籠っているわけであるから、その集成は実に数百数千の地方人の業績の結果と見る事ができよう。特に若干の江戸の方言文献によつて前代の俚言を知り、比較研究にこれを利用し得る事は、文献調査のみのもつ長所である。

本辞典はこの文献調査の方法により編纂したものである。

いわゆる訛語(音訛語)は、別にこれを集録して一篇の方言音韻論として整理すべきものと考えたので、採録を見合せた。本辞典の主たる内容は共通語と系統を異にする俚言である。

ただし、資料とした方言集が、玉石混在であつた結果、その資料価値を考え、比較考量して補正を加え編纂したが、もとより完璧を以て称すべきものではない。

次にこれらの方言集の持つ欠陥を述べて読者の参考に供したい。

(1)表記法。方言集の中には、音標文字を使用したり、アクセントを示したものもあるが、その多数は仮名表記で、それも発音表記としては不完全なものが多かった。表音仮名遣の中に歴史的仮名遣を混じしたものさえ少ない。

〔品詞〕 方言集には多く品詞別が記入してあるが、品詞を誤つたと思われるものも少なくない。用例が示していない場合が多いので、正否の判断はなかなか困難である。活用語の活用の種類は調べにくいものではあるが、これを記入したものはほとんど無い。

〔解説〕 解説は方言集で精粗さまざまである。単に対照的に標準語を掲げただけのものもあり、挿図を加え用例を示し、委曲に説明を施したものもあるが、一般に説明が不十分で、用例をあげないものが多い。特に類似の標準語や地方の類語との語義や用法の相違を説いたものは稀である。

〔語源〕 方言集には語源に言及したり、古語、外来語との関係を説いたものは相当に多い。参考とはなるが附会の説が多い恨がある。

〔分布〕 一県を区域とした方言集で、使用郡町村の註記の全く無いものもある。またその反対に若干の俚言について言語地図を挿入したものもあり、一様でない。

〔位層其他〕 使用者の位層（男女、老幼、漁農等）に関する註記や、待遇（尊敬、丁寧、卑罵）の別、語の新古盛衰などの別について注意したものが多い。特に古語、廃語、新語、流行語の別の記入は稀である。

〔排列〕 方言集には、方言を五十音順、いろは順で排列したもの、部門別で排列したものがある。使用目的によつてどちらがよいとは定めにくい、部門別だと分類に困るものができて来る。理想をいえば五十音順で排列し、部門別索引、慾をいえば地域別索引、標準語による方言索引を附載するがよい。かかる索引を具えたものは少ない。

〔附図〕 調査区域の地勢、交通路等を示した地図、広い地方ならば必要に応じて方言区劃図、旧藩領地図も必要である。地図の無いため分布が示してあつてもその地点が不明な場合もある。

〔附録〕 地方方言概観、方言文献解説、方言音韻論、方言矯正法の類を附載したものはあまり無い。

〔調査法〕 如何なる方法で、何時俚言を採集し編纂したか、この記載を欠いた方言集が多い。方言集の中には

既刊のものから奪胎したと思われるものさえある。

以上のような多くの欠陥を含む方言集を集成した場合、これを台帳としその欠陥を完全に補正するためには各地方言の実際について一々照合する必要がある、然らざる限り、如何に注意しても悉くその欠陥を除く事は困難である。

次に、本書の刊行に至るまでの経過を略記して、やや異例なこの序文を終える事とする。

編者が、はじめて方言集から俚言をぬき出しカードの作成に志したのは大正二年、国語調査委員会が廃止となり、その囑託を解かれた頃の事である。当時食るように市中に方言集を漁つてカードの量の増加を見て喜んだ記憶はまだ昨日の如く鮮やかである。方言書の蒐集には今日と違つて相当の苦心がいつたが、十年の集書の結果各地の方言集や俚言の資料が架上に加わるにつけ、方言辞書編纂の望も漸く成長していつた。大正十二年八月、老父が死去した。その下旬、計画中の日本方言資料の第一冊なる「南島方言資料」が出来、悲喜交々至るの感を禁じ得なかつた。越えて九月一日、東京に起つた震火災はこの新刊の三部を除いて方言集、カード、国語地図等、家蔵の一切の資料を一夜に灰燼と化し去つた。編者が東京をすてたのは、その翌年の春である。

その後の空白の数年を静岡、広島の地に送りながら、流石になお方言は棄てかねて、ひたすら資料の蒐集を日々の業とした。

方言辞書編纂の前途に再び微光を認めたのは昭和七年、帰京後の事である。その直接の動機となつたのは同八年平凡社が新に計画した「大辞典」に方言採録の方針を立てその寄稿について編集長格の沼波守氏から交渉をうけた事であつた。大辞典は毎月一冊の刊行を勵行したので、一冊分の原稿はやはり一ヶ月で脱稿する必要があつた。大辞典に「方言百万これは集められた語彙の数である。この中から最も意義あるもの約四万」と記してあるが、カード作成を急いだために、当時使用した方言集はほとんど五十音引のものに限つた。これを本辞典に使用した文献の量に比べれば約四分の一に過ぎない。

当時、方言辞典を単行本として刊行する事を平凡社に勧めてみたが、これはついに容れられなかつた。しかし、この大辞典の余材として十数万枚のカードができ、これが本辞典の最初の土台となつたのである。その後春風秋雨二十年、辞典編纂の業の上にも種々な事件が起つたが、太平洋戦争の進行はいよいよ、辞典の刊行を絶望的なものとした。

編者と前後して全国方言辞典の編纂を計画した人に橋正一氏と宮良当壯氏とある。橋氏は文献調査を志し昭和三年以来、既刊の方言集から十三万のカードを作り、これを部門別にして昭和十四年に謄写版で「分類全国方言辞典」を出版し、植物（上、中、下）助詞（一）の四冊を出した。氏の早世によつてこの事業は中絶したが、惜しむべき事であつた。氏のカードは今、仙台市のK氏の所蔵に帰したと聞いている。宮良氏は臨地採集の方法をとり、大正十三年から昭和十五年まで南島、九州、裏日本、東北の各地方を始め單身、全国に方言採訪の旅を継続した。その収獲たる音標文字表記の十四万の俚言は、これを部門別とし「日本方言彙編」二十巻に収める計画で昭和二十四年、まずその第一巻を謄写版で公開した。

橋氏も宮良氏も具さに経験されたように、全国方言辞典刊行の途は常に荊棘に閉ざされていた。英米語ならいざ知らず、国語の方言の場合、収支計算の見込の立たぬ事業として業者から一顧されなかつたのである。この間編者も同じ経験を重ねていた。たまた／＼特志の書肆があつて、これと契約を結んだ場合も、不思議に種々な故障が続出して中止となる運命を悲んだものである。本辞典の刊行も岩淵悦太郎氏の斡旋と東京堂の特別な厚意がなかつたら恐らく実現の日は無かつたかも知れない。

本辞典の材料は、前述の大辞典のカードとこれに数倍する増補カードで、その大部分は戦争中に採録を了つてゐた。このカードが焼亡もせず、終戦の日を迎え得た事はまことに非常な幸であつた。昭和二十一年、久松潜一博士の推薦で日本文学言語研究の題名で帝国学士院から研究補助をうけ、続いて文部省から人文科学研究費を交付された。かくてカード整理も順調に進行し、ついに約五十万の台帳カード整理の完了を見たのは昭和二十四年の春で

ある。このカードは約五百部の方言集と約三百五十部の地誌を中心とした方言文献から、重要と考えた俚言を選んで作成したもので、単純な訛語の類は最初から採録しなかつた。若し金資料に含まれる単語数を通算するなら、恐らくは百万をはるかに超える数に達しない。資料とした方言集、地誌の書名は小著「方言と方言学」にあげた刊行書目とはゞ一致するので、ここには省略する。方言集はほとんど家蔵のものであるが、カード採録後その半数は學習院で戦災にかかつて焼亡した。

本辞典は、この台帳カードを基礎として編纂したが、B6八五〇頁に盛り得る俚言の数は自ら制限がある。辞典編纂者の多くが経験するカードの放棄という苦汗を編者は数十倍にして飲まざるを得なかつた。刪愛した主なものは動植物語彙と民俗語彙との二類で、これらは代表的な俚言を掲げるに止め、その大部分を削除した。動植物名が方言辞典中で、多くの紙幅を占める事は「物類称呼」に徴しても明かであり、これを簡略にすることが辞典を簡約する捷徑である。動植物名に大半のページを割く事が果して辞典の性質上、妥当なりや否やを疑つたからでもある。更に大きな理由は動植物語彙、民俗語彙は専門家の手で結集さるべきものであり、その要求に適する良書出版が期待されていたためでもある。

一方、努めて削除を避けたものに南島語彙がある。琉球語が国語研究特に国語史研究に対して最も貴重な資料であることは改めて繰り返すまでもない。これらのカードの多くが宮良氏の採集に拠つたものであることをここに明記して同氏に感謝の意を表したい。

前代の俚言については、一々所載の書名を明かにしてなるべく多数これを存置した。元来、わずかな分量でもあり、俚言の變遷を研究する好資料と思つたためである。

とかく方言集で虐待されがちな名詞以外の語彙については、なるべく多くこれを採録することに努めた。上記の方針の下に、一々のカードの選択を慎重に良心的に行つたが、これは個人によつて意見の相違も考えられる。正しき批判があれば、改めるに吝かでない。

補正の手は加えたが、本辞典にも前に述べたような資料の欠陥の反映は免れない。解釈、用例の不足もあるが、特に部門別索引を欠いたのは諸種の事情から止むを得なかつたとはいへ残念である。これは機会が与えられたら、まず補いたいものの一つである。

最後に、昭和八年の「大辞典」以来、編者に協力された現千葉大学助教授大岩正伸氏の功勞を特記したい。カード採録のために戦時中、前後十五人の助手諸君の手を煩わしたことはあるが、終始二十年に近く一貫して辞典編纂に誠実と熱意とを以て尽瘁されたのは氏一人である。戦時中カードが戦火を免れたのも、本カードはこれを埼玉県越生の長谷部病院に疎開し、副カードは警報毎に防空壕に移した氏の周到なる処置の賜物である。特に本年六月以後、既に完成せる原稿を全巻にわかつて再閲し、疑わしきは原本に正し、組版の進行につれ、加筆と校正とのために、文字通り不眠不休の努力を続けたその献身的な辛勞に対しては、ここに深き敬重と感謝とをささげざるを得ない。

本書の刊行については、岩淵悦太郎、高藤武馬、平井四郎、和田利彦、増山新一、石井良介の諸氏の厚意と援助とに負うところが多い。深厚の謝意を表明する。

昭和二十六年初冬

学習院大学国語研究室にて

東 條 操

編纂の趣旨

方言辞典の本質は国語の方言語彙を記述し登録する点にある。

国語の方言語彙は、言うまでもなく国語そのものの語彙である。従つて、正確な意味での「国語辞典」は、方言語彙をも含まなければならない。本来の国語辞典は「普通語辞典」乃至は規範意識を有する「標準語辞典」とは別箇の存在であつて、現代普通語のほかに古語をも収載することは勿論、古今の方言をも採録すべきものであるが、従来の国語辞典が方言を殆ど載せないのは、恐らくは事実問題として不可能であることが原因となつて、十分に方言にまで記述が及ばなかつたのであらう。やむをえないことではあるが洵に遺憾なる事実である。

方言は未だ開かれざる国語の宝庫である。国語の語彙の一半をしめ載録しなかつた国語辞典は、方言をも採録することによつて、初めて国語の語彙の全貌を記録することができる。リンク（茶釜の把輪）、ボウ（液体をつぐ時に容器的尻に依つたこと）そのほか無数の命名表現があることを知れば、国語の語彙がいかに豊富であるかということが理解されるであらう。僅かに本辞典に収載した方言だけを加へることによつても、国語はその豊満さを倍加するに

違ひない。

方言辞典は、古語に重点を置いた「古語辞典」が国語辞典の一種若しくは一部として有り得る如く、国語辞典の一環として存在するものである。従つて、将来理想通りの国語辞典が現れるならば、方言辞典は古語辞典と共にその中に統合されるべきものである。

方言辞典の本質が斯くの如きものであつてみれば、方言辞典の形態は当然この「全国方言辞典」の如きものでなければならない。

語彙によつて分類彙集し、或いは標準語からそれに対応する方言を索出するような形式も考えられるが、それは本質的に「方言索引」の域を出ないものであつて、方言辞典としての性質を没却したものである。あらゆる方言語彙を記述し得る形式は、方言語彙の五十音順排列乃至はそれに準ずるものしか無いであらう。

方言語彙の表記を音符号によつて示すことも考えられるが、それは、全国諸方言の語彙事象を記述すべき辞典の語彙の表記としては、本質的に疑問があり、且つ事実上不可能に近い。音声事象は音声事象として独立別箇に記述すべき重要な研究事項でもあるのである。

本辞典に於ては、語彙を表示するのに仮名を用い、仮名遣にこだわることなく語形を表示したが、音声を精密に表記することを期しはしなかつた。語彙の表示は国語の音韻意識にもとづくことが必要にして十分なる条件であると、

信するからである。

○ 国語の歴史悠久数千年、非常な発達をして今日に至っているが、いかなる原因によって新語が生れ、いかなる方法をもって新語が作られているか。国語史の原理の研究は従来その資料を殆ど過去の文獻語にのみ求めていたが、資料を方言に仰ぐことによって、眼界大に開けるものあるを疑わない。

国語史原理の有力なものの一は、少しく語形を変えることによって分化した意味を表現する方法である。ウチ・ブチ（打）とムチ（鞭）、フシ（惜）とホシ（欲）との如き類であるが、本辭典に収録した語彙を精査するならば、それがいかに有力に働いた原理であるかを知るのである。日（比）と火（非）、上（加美）と神（加微）とは、或いは語原を異にするかも知れないが、特殊仮名遣の相違のみを根拠としてそう考へるならば早計である。

コ（粉）とコナ、タネ（種）とサネとの如きも、かようにして発生した語であろう。よく同義語ということが言われるが、厳密なる意味に於ける同義語は存在することが無い筈である。コナは本来「屑物」の意味が添加されたものであり、サネは種のうちでも実の中にある果物の種などを特に区別した表現だったようである。かような事も方言を観察することによって推定し得るのである。

語彙の変遷については、例えば紫陽花の意味に転用した

「七面鳥」の如き、或いは諸種の意味に転化した「南蛮」の如き、資料として多くの好例を見出すであろう。特に、普通語として原義の失われている語については、方言の考案によって初めて本義を知ることができよう。「蛇がユワイ」「流行がスタル」の如き、その一例である。

語そのものの成立には、その語を使用する人々の生活が結びついている。蚊と言つて蚊子を意味し、普通の蚊を特に「夜蚊」と稱して区別する如く、或いは虹を「錦鉦」と表現する如く、対象の把握の仕方或いは表現の方法は必ずしも国内一様ではない。日本人の物の見方考へ方を考察する場合には、普通語のみならず方言についても觀察を怠ってはならないのである。

語の構成論に於ても、普通語には僅かにゴムケン（消聲）の一語ぐらいしか見当らない特殊な構成が、或いはギツメルシ（自在鉤）或いはトリクサ（豪華採取）の如き若干例を加えることによって、何等かの解釈を要請されるであろう。

文法事象については、独立に方言文法論が成さるべきものであり、語彙辭典としては殆ど触れるところが無いが、少數の助動詞助詞或いは接辞を取入れてある。品詞名の注記は甚だ統一を欠くが、それは寧ろ今日の文法論の反映である。標準語文法についても多くの疑問を存するが、方言を考へることによって、再考點置しなければならぬ事柄の一層多いことを知るであろう。本来形容詞の一用法である

コナエナエを副詞とし、ベシの連体形から出たベーを助詞としたのも、やむをえないところである。

音韻研究についても、独立に音韻論が成さるべきものであって、語彙辞典の記述するところではないが、国語音韻論の資料としては、音韻転化の例としてかなり多くのものを取出すことができるであらう。それらを整理することによって、転化の方向について或る程度の法則を立て得る可能性もある。例えばコーバイモ・コーバイモ（馬鈴薯）は直接の転音でなく、もとコウバウイモからの音韻分化であり、フーズ・フーズーバナ（紫雲英）はホーゾーバナからの転化であらうという推定が、法則性を根拠としてなされるかと思う。

古語の解釈の上に方言が参考となることは、伊久里（万葉集）、麻賀礼（古事記）そのほか若干の優れた先例があつて多くを言う必要も無いが、本辞典の活用によって更に新見の生れる可能性も多い。諸曲安宅の「かほと馳き強力に太刀刀を抜き給ふは。めだれ顔の振舞は隠病の至か」は、メダレ、メダレヲカウ（人が弱いとみるとつけあがる）の方言が参考となるし、浄瑠璃女殺油地獄の「とどしては手もとどかねば立上り」はトドスル（坐す）によつて正解が得られる。

語原の研究に方言が役立つことも言うに及ばないところである。俗語のアベコベ（反対）が「彼方此方」の意であることは類例によつて明かであり、オジャン（終）は従来の語原説のほかにジャミ・ジャミルとの関係から有力なる

一説を立てられるであらう。或いは「家」の語原を「上」の分化と考定し、或いは「星」の語原を斑点として把握した名称であらうと推定することも、本辞典の関係語彙を比較することによつて、或いは強められ或いは思い消かれるところである。

地名の研究は地理學上に重要な意味を有しているが、その多くは今日の普通語では既に解し難くなっている。方言を参考するならば、例えば太平洋岸の所々にあるスカ・スガという地名にしても、その命名の由来が推定できるし、また千葉県の四街道という地名が、遠く香川県に四辻の意で日常語として行われている事実は、それが偶然の一致であるかどうか、研究すべき問題となつて来るであらう。

方言研究の上にこの辞典が有用であることは勿論言うまでもない。方言区画説と方言同語論との対立乃至並立に關しても、依據資料に多少の地理的偏倚があるから断定的根拠とすることは憚るべきかも知れないが、取載語彙の分布状態を検討することによつて、従来の見解を一歩進め得ることだけは疑い無い。蛙又妻を意味するドンク（九州）が遙かに離れた福井県に行われていたり、打消のナンダ（近畿）が群馬県の一隅にあつたりするようなことは、大いに考えさせられるところである。

概念としての標準語は適確ながら未だ定立せられていないものであるが、将来これを制定する場合には方言からも遺珠を拾つてこれを加え、表現力に富む優れた言語にした

いものである。本辞典はそのためにも多くの資料を提供するであろう。魚のシラコ（鱈卵）に対して鱈の卵をマコと称し、一人で物を担ぐに対して二人で担ぐことをウメまたはカクと言ふが如き、今日の普通語には区別する方法が無く、方言に於てのみ区別し得るものも少なくない。或いは名も知れぬ多くの星を「彗星」と称し、横坐りを「流れ座」と言ふが如き、思はず膝を叩かしめられるような表現も多い。これらのうちには、標準語の制定を待つまでもなく、文芸家あたりに拾ひ上げられて普通語に昇格せしめられることが望ましいようなものもある。

国語教育に於て方言矯正ということは重要な一部門であるが、本辞典はそのためにも役立つように配慮した。往年の方言撲滅論は論外として、方言必ずしも全部改むべきものでないこと前記の如くであるが、一国の言語が分裂し、同じ国民でありながら官語による十分なる意思の疎通を欠くことは、憂うべきことである。全国共通の言語の用いられることが理想である。少くも郷土語と共に普通語にも熟達し、普通語によって十分に意思の表現ができるまで習熟せしめることは国語教育の任務である。たゞ、地方に生れ地方に育つた者にとっては、或る語が方言であるか否かを判じ難いことも少くないようであるが、その際にも本辞典を役立てることができようであろう。例えばシアサツテを明々後日の意に用い、ヤノアサツテを明々後日の意に使うのは、普通語の言い方でないから、明々後日の意味のヤノ

アサツテはシアサツテと改め、明々後日の意味のシアサツテはヤノアサツテと言ふように心願すべきである。或いは蜥蜴をさしてカマヤリと言つてゐるならばトカゲと改むべく、蟬鳴を意味するトカゲという語を使つてゐるならばそれをやめてカマヤリと言ふように注意する必要がある。本辞典に於ては、漢字を用いた語解の次に仮名書きしたものがおおむね今日の普通語を示したものである。たゞし、アメンボ・アメンボ（水馬）、クルブシ・クロブシ（黒）などの如く、いずれの語形を標準語と認むべきか定め難く、普通語としても動搖してゐるものについては、仮名書きを必ずしも統一してないが、標準語としての判断を避けるためにはやむをえないと考える。

普通文の中に時折方言が混在し或いは引用されているような時も、この辞典を利用することができる。例えば文部省著作教科書「高等国語」(一上)に、「関の小まんが米かす背は一里聞えて二里ひびく」とあるが、このカスは普通の国語辞典に解説されてない意味であつて、本書によって初めて、中部地方から近畿にかけて行われる「米をとぐ」という意味の用語であることが分るであろう。同じく「中等国語」(一)の野口英世のことを扱つた一文中に「てんばう」という語が見える。これは国語辞典でも採録しているが、この語が東北を主として本州東半部に使われているということとは、本書の「てんば」を見て初めて知り得ることである。

獅子文六の「てんやわんや」がいかなる語であるかを知りたいような時も、この辞典を見れば、それが江戸時代の文獻に採録されており、類似した「てーやわいや」という語が使われている地方のあることも分る。火野葦平の赤道祭に出てくるアカングアュー(人魚)という琉球語の語原が赤鯉魚という意味から来ていることも、本書によって知り得るところである。

○ 本辞典編纂の趣旨、方針並びに効用とも言うべきものは前記の如くである。

編纂の方針は正しいと信じるが、何分にも全国方言辞典は殆ど本邦最初の企てであるから、理想通りのものを作ることはできなかった。資料の多くが従来の方言研究家の業績に頼ったものであり、全国にわたって実情を吟味するこ

とは不可能であったから、或いは誤記誤報をそのまま採り用いたものがあるかも知れないことを慮る。現代文獻についても古文獻についても、比較研究の結果その誤りと思われるものを或いは正し或いは省いて、おおむね信じて得る語彙のみ採録したつもりではあるが、なお今後の補訂に俟たなければならない。

本辞典の言わば効用については、仮りに数項を数え立てたが、そのほかにも利用の仕方はあるであろう。それらの利用方法のうちには、普通語から方言を索める索引を必要とするものもある。索引は、方言辞典として本質的に必要なものではないが、辞典の利用価値を一層大ならしめるものであって、これを欠くことは編者の本意ではない。今は諸種の事情によって省かざるを得なかったが、機会を得て補いたいと考えるものである。

凡例

一、採録した方言は、主として既刊未刊の方言集から信頼するに足ると判断した報告を引用したものであって、これに編者の直接採集によるもの若干を加えた。

一、方言集からの引用には文献名を注すべきであるが、

便宜上おおむねそれを省略した。ただし、江戸時代の文獻によるもの及び明治時代の南島文獻によるものは略名を注した。

一、使用上の便宜を考えて、見出しをなるべく多く立てる方針をとった。学問的には一項目にまとめるべきものを数箇所に分散掲出したこともあるが、その場合には必要に応じて他を参照し得るように印をもって関係語彙を指摘

することに努めた。

一、同じ語原に由来すると考えられる語、同じ語の意味変化と考えられるものは、なるべく一項目におさめ、語義の違ふことに①②③の番号をつけて区別した。その番号の語義を有して語形の少しく相違している語がある場合は、同じ番号の下に見出しと同じ太字体をもって掲げた。

一、慣用句は、索引の便宜のために、おおむね冒頭の一語の位置に排列し、その語のみ太字で示すことにしたが、時に全句をもって排列したこともある。

一、語彙の排列は、方言を表音式に書き表わしたものの五十音順による。ただし、「てい」は「て」、「と」は「と」に附したが、「くわ」は「か」の位置に置いた。時に「ぢ」「ぢー」を別の場合もあるが、現代語に於ては殆ど「じ」「ぢー」を別の場合が多く、排列には全く「じ」「ぢー」と同じ取扱いをした。長音符は、第一音節につく場合のみおおむね第一音節と同じ母音として取扱ったが、そのほかの長音符は、それが無いものと同様に排列した。

一、語彙は略符・簡略・略略・略略・略略・略略・略略をもつて示した。略略は形容動詞、略略は連体詞の意である。単語でないものはおおむね略としたが、時に用法に従って略略などと示したところもある。品詞名の注記を欠くものは、品詞の所置が不明であるか、又は名詞の場合であつて、その際には誤謬を同じ品詞の語を用いることを心懸けた。

一、語源又は語の構成を、括弧の中に漢字によって注し

たものもあるが、多くの不明のものと共に臆にでも直ぐ考えつかれるようなものにはこれを省略した。

一、努めて例をあげて語の用法を示すことにしたが、これによって品詞名注記の欠を補うこともでき、動詞の活用の種類を推察することができる時もあるであろう。ただし、この場合その語の前後はおおむね普通語によって、分りやすいようにした。

一、関係語或いは原形などを知り得るように、↓印をもつて、努めて参照すべき項目を指示することにした。

一、使用地域は、古文獻によるものを先にあげ、次に現代の分布を、いずれもおおむね東北から西南への順序で示した。

一、現代の方言の使用地域は、おおむね郡名をもつて示し、広く通用していると思われるものは県名（鹿児島県の一部及び旧沖縄県は「南島」とした）、極めて限られていると思われる場合は町村名を示した。国名はなるべく避けて県名に従ったが、古文獻によるものは勿論、現代の地域についても、必要に応じて国名をもつて示したこともある。

郡名及び国名は、巻頭に添えた地図によってその位置を知り得るようにした。地図は最近の郡名を頭二字の略記によって示したが、本文中には時折旧郡名を用いているから、必ずしも一致しないことがある。

一、現代方言として採録したものも、明治後期から昭和までの報告調査によるものであるから、使用地域として示

した地方でも既に廢語となつて、今日通用していないことがあるであらう。

一、使用地域として記した地名は、それらの地方で使われることを示すものであつて、それらの土地だけにしか行われないという意味ではない。

一、舊名を注記して引用した古文獻は、慶長年間の日葡辞書以後、物類称呼を初めとして三十部以上になるが、それらのうち略称によつて示したものを左に示す。括弧内が使用略称。

重訂本草綱目啓蒙（重訂本草）

仙合言葉以呂波寄（以呂波寄）

方言遠用抄（遠用抄）

棚田正衡・仙合方言（方言考）

大里源右衛門・仙合方言（仙合方言）

浜萩仙合部補遺（浜萩補遺）

新撰大阪詞大全（大阪詞大全）

菊池俗言考（俗言考）

南島八重垣（八重垣）

浜萩（はまをき）と名づけられた書物は、東北の庄内及び仙台と九州の久留米との三種を採り用いたが、いずれもその地名によつてどの浜萩であるかは直ちに分るであらう。特に他地方の言語についての資料とした場合は例えば「庄内浜萩」というように断つた。

一、古文獻のうち、俚言集覽、常陸方言、久留米浜萩の

三書には、明治に入ってから増補が加えられている。これらの増補はむしろ現代方言として採録すべきであつたが、いちおう「俚言増補」「常陸補遺」「浜萩補足」と明記して古文獻中に併載した。

一、方言表記以外の一切の仮名遣は、現代かなづかいを守つたが、当用漢字及びその音調は全く顧慮することをしなかつた。当初、当用漢字の範囲内で審こうと試みたが、とうてい不可謬であることを知つたからである。